

【ポスターセッション】

ケアマネジメント技術教育の効果に関する研究

ーケアマネジメント演習の教授方法の違いによる知的理解への影響についてー

○ 高知県立大学 二本柳 覚 (6983)

鈴木 裕介 (高知県立大学・8837)

キーワード3つ：ケアマネジメント技術教育・教育方法・ワークインデックス

1. 研究目的

2000年に介護保険に導入されて以来、ケアマネジメントは障害者支援など、多くの分野で活用されるようになった。そのため、ソーシャルワーカーの養成課程において、ケアマネジメントを活用するための技術(以下、ケアマネジメント技術)を教授することは必要不可欠であると考えることが出来るだろう。しかし、実際のケアマネジメント技術教育は、ソーシャルワーク演習などに包括され、その中の一コマとして取り扱われることがほとんどである。結果として、学生はケアマネジメントという言葉は知っているものの、それをいかに活用するのかを理解しないまま、実践現場に投入されることとなる。

そのような中、「ケアマネジメント演習」などといった、独立した科目としてケアマネジメント技術教育を実施している養成校が少ないながらも存在する。しかし、ケアマネジメント技術教育はまだ緒についたばかりであり、その教育方法についても各校独自のやり方で実施されているのが現状である。

そこで本研究では、「ケアマネジメント演習」を実施している2校に対して調査を行い、ケアマネジメント技術教育の指導方法によって、ケアマネジメント技術に対する知的理解の変化に違いは生じるのか、また、その結果から、ケアマネジメント技術教育の在り方について検討することを目的として実施する。

2. 研究の視点および方法

調査対象は、2013年度にケアマネジメント演習を受講したA校及びB校の学生とした。調査は、各校のケアマネジメント演習担当教員の協力のもと、ケアマネジメント演習時間内に実施した。調査方法は、野中が開発したケアマネジメント作業指標(Work Index 以下「WI」とする)を用いる質問紙調査である。

WIは、知的理解と実行程度について評価するものであるが、今回の調査においては対象が大学生となるため、知識レベルに付いて回答を設けた。項目は「何のことか全くわからない」「おおまかにわかったが、一部の理解が危うい」「内容は何とか理解できた」「内容は理解できたが、人に説明するには自信がない」「すでにほぼ完全に理解しているし、人にも説明できる」の順に1-5の点数を配置した5段階評価で回答を求めた。WIの検討には、ケアマネジメント演習の初回及び最終回の2地点のデータから行った。

3. 倫理的配慮

調査結果については全てデータとして処理を行い、個人を特定されることは一切ないこと、本調査結果については日本社会福祉学会等への報告を予定していること、また本調査の協力の有無による当該科目の成績への影響は全くないことを伝えた。その上で、本調査用紙を記入、提出をいただくことをもって同意いただくこととした。なお、対象者は同意後いつでも調査者に対して調査の中止を求めることができ、それによる不利益は一切生じない事を合わせて伝えている。なお本調査は、高知県立大学社会福祉研究個人情報保護・倫理審査委員会の承認を受けたものである。(第334号)

4. 研究結果

A校、B校ともに、初回及び最終回のWIを実施した学生を調査対象とした。その結果、A校24名、B校45名の計69名について分析を行った。

初回及び最終回の結果について、クロス集計をかけ、 χ^2 二乗検定を行った。その結果、初回については、B校において全体的に点数が低く、カイ二乗検定においても、すべての項目で有意に差が見られた。しかし、最終回では、1~2の割合が両校とも大幅に下がり、得点のバラつきについてはA校のほうが4~5をつけた割合は全体的に高いものの、前半に比べて大きな差は見られない。逆に「受理会議の開催」でA校では半数が1~2であったことに対して、B校で約84%の学生が3以上をつけていることが目立った。またプランニング6項目のうち、5項目において4~5をつけた割合がB校の方が高く現れた。カイ二乗検定では、「受理会議の開催 ($p>.05$)」「関係者からの情報収集 ($p>.05$)」「家族の能力と限界 ($p>.05$)」の三項目以外については、有意差が認められなかった。そのほかの結果については発表時に報告する。

5. 考察

A校・B校の教育カリキュラムについては、A校が前期にケアマネジメント論を履修したうえで後期にケアマネジメント演習を受講、B校が前期にケアマネジメント論とケアマネジメント演習を同時履修する形で行われた。そのため、B校の初回得点が軒並み低く出たことについてはケアマネジメントについてほとんど教育を受けていないことに起因するといえる。ケアマネジメント論及びケアマネジメント演習についての相互効果については、最終的な理解度において、若干A大学のほうが割合として高く出たものの、統計的に優位であると言い切れるほどのものではなく、またケアマネジメント論のみを受講した状態であるA大学の初回に比べても十分に高い結果が出ており、今回の調査結果からケアマネジメント論とケアマネジメント演習を同時に履修することによるデメリットは現在のところ見受けられない。

本調査の結果から、ケアマネジメント演習による知的理解の変化については、指導内容の違いによらず、一定の効果が期待できると考えられる。ただし、理解の程度、範囲については、指導内容、指導者による影響が少なからず存在すると考えられ、今後の調査課題として継続的な研究が求められる。